

第27回

函館港イルミネーション映画祭

第25回シナリオ大賞

函館市長賞〔グランプリ〕

2021

# 雲の切れ目から 覗いた函館

塩田 泰造





## 【作者プロフィール】

しおだ たいぞう

94年早稲田大学法学部卒業。劇団『大人の麦茶』を主宰。脚本・演出を担当。テーマパークやTCMの企画・演出を手掛ける。

代表作 愛・地球博ガスパビリオン・肥前さが幕末維新博覧会

【あらすじ】

北友真宵（まよい）と穂苜拓馬（たくま）は函館市の高校に通う十六歳。二人は今晚「函館の街に、世界一大きな秋刀魚を描く」という計画を立てている。

二人の出会いは四年前。小学校6年の学級新聞を一緒に作る係になった。拓馬は「ウンコマン」と呼ばれている変わり者の少年で、仲良しの女子とチームになりたかった真宵は、最初は嫌悪感を抱くが、知れば知るほど、拓馬は純粹で優しい子だった。日に日に拓馬に惹かれていく真宵は、拓馬の「離れないと、見えない」という言葉が妙に耳に残る。学級新聞のテーマを「函館から台湾まで三世代に渡って旅をする蝶々の観察日記」と決めた二人は、拓馬の家で陽気な父に歓待され、日の出の時間に神秘的な蝶の羽化を目撃する。拓馬は真宵にとってとても特別な存在になるが、ある日、真宵が出来心でついた「不治の病にかかっている」という嘘を拓馬に知られてしまい、それきり、二人は疎遠になる。

四年後、無口で目立たない女子になった真宵が通う高校に、拓馬が転

入して来る。拓馬に「銭湯の女湯を覗いた」という噂が立つと真宵はその疑いを晴らしたくて、放課後、秘かに拓馬を尾行する。拓馬は函館の街を走り、公民館の塀を越え、銭湯の屋根によじ登った。シヨックで泣きそうになる真宵。だが、拓馬の目的は覗きではなく、宇宙飛行士である拓馬の父が搭乗する宇宙ステーションが、函館の上空を通過する晩に、スマートフォンでGPSをオンにして函館の街を走り回り、父の好物の秋刀魚の『GPS地上絵』を描いて父に見せる、という計画のためであることを知ると、真宵は嬉しくなって協力を申し出る。二人は入念なプランを練り、中秋の名月の晩にその計画を実行する。

しかし、その後、真宵は、拓馬の父が、地球に帰るロケットを事故で失い、もう帰って来られないという衝撃の事実を知る。孤独な拓馬を少しでも慰めたくて、新しい下着を身につけて拓馬の家に向かう真宵。だがそんな真宵を迎えたのは、拓馬と、民間のロケットに乗って無事に帰還した父の笑顔だった。

真宵と拓馬は恋人になり、コロナ禍で遠距離恋愛を育んでいる。

【人物】

北友真宵 きたしもまよい

(12)

(16)

(19)

穂苺拓馬 ほかりたくま

(12)

(16)

(19)

穂苺康志

(42)

(46)

拓馬の父。宇宙飛行士

北友芳江

(38)

真宵の母

北友耕三

(69)

(73)

真宵の祖父

中野ミツミ

(12)

真宵の小学校の友人

藤原アヤ

(12)

真宵の小学校の友人

宮本

(38)

小学校の担任教師

野田

(40)

高校の美術部顧問

松野井先輩

高校の先輩

水島智香

(16)

高校のクラスメイト

吉田文菜

(16)

高校のクラスメイト

男子生徒 1・2・3

女子生徒 1・2・3

サッカー部員

クーパー

(40)

宇宙飛行士

○北友家・リビングく洗面所（朝）

リビングのテーブルに北友家のアルバム。周りに広げられた家族写真を1枚1枚なめながらカメラは洗面所へ移動。高校の制服姿の北友真宵（まよい）（16）が髪を乾かしている。

真宵M（モノローグ）「人はいつかから自撮りをはじめたんだろう？お母さんの時代にはカメラはお父さんだけが使う機械だった。さっぽろ雪まつり。誰かの結婚式。すました顔の若いお母さん。もつと笑えばいいのに。写真は特別な日にだけ撮ってもらう、特別なものだった」

真宵、髪を梳かしスマートフォンで

自撮りのポーズ。真宵の祖父の耕三

（73）が、洗面所を覗く。

真宵M「今はスマートフォン。腕を伸ばして自撮りする。私が自撮りをしようとする」と自称カメラ通のおじいちゃんは、決まってひと言、もの申す」

耕三「あゝあゝ、真宵、カメラを構える時はもつと脇を締めねえと」

真宵「おじいちゃん、わかってない」

耕三「耳をそばだてて」ああん？」

真宵「（耕三に聴こえるよう、更に大声で）脇を締めたらカメラが近いの！近いと顔が広がってブスに写るでしょっ？私ほできる限りカメラから離れたいのっ」

耕三「あったもんでね。脇を締めねえとピンボケの写真に」

真宵「やつ！もうこんな時間」

真宵、通学鞆を抱え、急いで玄関へ。

真宵「腕を伸ばしても足りない時は自撮り

棒を使うっ。さらにセルフイー用のドロ

ーンなんてセレブな手段もあるのさ！」

耕三「待たんか、真宵、カメラは脇を」

真宵「行って来まーす」

耕三「(耳をそばだてて) なんてえ?!」

### ○同・玄関先(秋・朝)

真宵、外へ。耕三、追って来る。

真宵「わかる? おじいちゃん! 私はね、い

かに自分から、カメラを遠ざけて自撮り

をするかに一所懸命なわけ!」

耕三「なして?」

真宵「なぜって? それは」

自転車にまたがった穂苅拓馬(たく

ま)(16)、玄関の外で待っている。

拓馬「・・離れないと、見えないから?」

真宵「あ、外まで聴こえてた?」

耕三「(拓馬を見て) おっ、君は」

拓馬「(耕三に会釈して、真宵に) 乗って」

真宵「元町ルート最終確認だね」

真宵、自転車の後部に腰かける。拓

馬勢いよく走り出す。

耕三「気いつけてなー! ・・(ひとりごと)

真宵、拓馬クンと仲直りしたのか」

### ○函館・坂道(秋・朝)

紅葉の坂道を走る二人乗りの自転車。

真宵、スマホの地図を照合している。

真宵「次、右折ね」

拓馬「わかってる」

真宵M「腕を伸ばして、自撮り棒を使って、

ドローンを飛ばして、そうやって距離を  
どんどん遠ざけていくと、最終的には人  
工衛星になる。これは私の考えではなく  
て・・拓馬の意見」

拓馬「知ってる？人工衛星から撮影された

写真は、地球の自撮り、なんだよ」

真宵「地球の自撮り？！なにそれ？！」

拓馬「真宵ちゃん、交番」

素早く自転車から降りる真宵。二人、

自転車を押して、交番の前を通過。

拓馬「人はみんな、宇宙から見た地球の写

真が好きだよな？どうしてか、わかる？」

真宵「ええと、青く美しい生命の星だか  
ら？・・って教科書には書いてありそう」

拓馬「写真の中に自分がいるから」

真宵「えっ？」

立ち止まり、空を見上げる拓馬。

拓馬「小さな、見えないくらい小さな真宵  
ちゃんと僕が写っているから。地球の自  
撮りは、僕らの肖像写真なんだよ」

真宵「(ため息) 拓馬。あんた、ほんっと、

普通じゃないわ」

拓馬「あのね、真宵ちゃん、普通の人なん

て一人もいないんだよ」

真宵「はいはい。さ、いよいよ、今夜だね。

世界でいっちなばんおつきいサンマ・・」

拓馬「今ならまだ引き返せるよ」

真宵「それはもう言わない約束だよ」

拓馬「タイムリミットはわずか20分・・」

真宵「上等、上等。美しい時間は短い・・

でしょ？」

拓馬「・・だね・・よろしくな、相棒」

真宵「おう、よろしくなっ」

カメラ、二人から離れて空へと浮上。

小さくなっていく二人。やがて、雲間から覗いた函館の街の俯瞰へ。

真宵M「その夜の20分のことは、一生忘れない。私は、地球の写真を見るたび、胸の奥が、ぎゅっとなる」

### ○タイトル『雲の切れ目から覗いた函館』

#### ○函館・俯瞰

タイトルが消える。カメラ、雲間から覗いた函館の街の俯瞰から、ゆっくり函館山の麓の小学校へと寄っていく。

真宵M「ホカリタクマに会ったのは、今か

ら4年前。小学6年生の時」

#### ○小学校・教室（秋・日中）

T…『2015年（4年前）』

窓外に紅葉。休憩時間。教室の後方に小学六年生の真宵（12）。

真宵M「ただの風邪なのに三日も休んでしまった時から、嫌な予感はしてた。6年B組の時間は光の速さより速い。私の存在は微妙に薄くなっていた。中野ミツミと藤原アヤ。私の特別な親友二人よ、やっと手に入れた百点満点の友よ・なぜ復活した私に」

ミツミ（12）とアヤ（12）、真宵の近くへ。

アヤ「真宵、風邪ひいたって？」

ミツミ「もう大丈夫なの？」

真宵「あ、うん、もう全然へー…」

アヤ「(聴き終わる前に) そうなんだ」

ミツミ「(少し残念そう) よかったねー」

担任の宮本(38)が教室へ。ミツミ

とアヤは慌てて自分の席へ戻る。

真宵M「くっそー、かなしいぜ、ワnten

ポ速い返事。ねえ、なんか私が登校した

ことがっかりしてない？」

宮本「ええ、ではだな、学級新聞。これを

作るにあたってだな、各々自分の好きな

人、パートナーをだな、一人決めて、そ

の相手を見なさい。せえの！…ハイ」

真宵「ハッ？」

宮本「で、だな。今、目が合った人と二人

組のワン・チームになりなさい」

真宵M「なっ?!なにー?!」

宮本「騒がない。すみやかに、すみやかに」

ミツミとアヤが目を見合わせる。

真宵M「あたまがクラックラした。ミツミ、

なんだ?その曖昧なチラ見は。で、アヤ、

なんだ?その「ごめんね、そういうこと

だから」的な手首の動きは?ミツミとア

ヤがスローモーションで手を繋ぐ・見

るな。私、見るな。その時、この世界か

らピンク色も水色も消え失せ、全てが白

黒に、私は空気になった。空気と化した

私を見る者などもはや一人も、一人もい

な・ん?

隣の席に六年生の穂苺拓馬(12)。真

宵をまっすぐに見ている。

真宵「なに見てんの?」

拓馬「えっ？」

真宵「えっ？じゃないよ。なんでこっち見てんのってば？」

宮本「はい、そこ。キタトモマヨイとホカリタクマ。早速出来たなあー、初の男女のワン・チーム」

真宵「ハアっ？」

男子1「ウンコマンカップル誕生！」

どよめく生徒たち。ミツミが口を両手で押さえ、アヤが大笑いしている。

真宵M「アヤが口を開けて笑っている。なんて醜い顔だ。私、知らなかった。笑って顔ってこんな醜いんだね。ねえ、おじいちゃん・昔の写真は笑顔がなくてよかったね。今はね、カメラの性能がいいからさ。脇を締めなくても、笑っていても、

ピンボケじゃない写真が撮れてしまうんだよ。私の目に焼き付いてしまうんだよ。私は、さっきまで百点満点と思ってた親友二人に・・・」

### ○同・屋上へ続く階段・踊り場（放課後）

真宵、一人でぶつぶつ呟いている。

真宵「よし、よいい、スターツ。（ホラー調の鼻歌に続いて）あのさあー、ちよつといいく？アヤ。ミツミから聞いたんだけど、あんた、私が学校休んでる間に、私の悪口言いふらしてくれたらしいじゃん？？からの（壁ドンして）ええ？だつてこれ、ミツミに聴いたんだよお、じゃあミツミが嘘ついてるってわけえ？どうなの？どっちが真実？ここで、ドヤ顔つ

と。(醜く笑う) クラスの空気と化した私だが、墮ちる時は手ぶらでは行かぬ。必ずやつらを地獄へ道連れにしてやるんだ。よおし、もっかい。よいい、スターツ！(ホラー調鼻歌) あのさー、アヤ、ミツミから聴いたんだけど」

屋上の扉が開き、拓馬、登場。

拓馬 「もうすぐ来るよ」

真宵 「うひゃあー！」

拓馬 「雨」

真宵 「えっ？」

拓馬 「屋上に行くんじゃないの？」

真宵 「・ホカリタクマ、聴いてた？」

拓馬 「なに？」

真宵 「今の」

拓馬 「北友さん、透明な傘、持ってる？」

真宵 「ビニ傘？傘立てに置いてあるけど？」

拓馬 「貸してもらえる？」

真宵 「いいけど、なんで？」

拓馬 「これは、国家機密なんだけど、透明の傘は、もともと、空中を落下する雨の断面を観察するために発明されたんだって」

真宵 「(ドン引き) へえく・・・」

拓馬 「借りていい？」

真宵 「ご勝手に」

拓馬 「ありがとう」

拓馬、階段を駆け降りてゆく。

真宵 M 「ホカリタクマ、ど変人。ウンコマンと呼ばれるている。私は呼ばないけどさ・・・あれは新学期が始まったばかりの頃・・・」

○回想・小学校・教室（春・日中）

T…『半年前』

窓外に満開の桜。担任の宮本、音楽の授業中。真宵の隣の席でミツミが腹痛に苦しんでいる。

宮本「ああでは諸君、春の歌といえば・・・」

真宵M「隣の席の女の子が急にお腹が痛くなってしまうて」

ミツミ（額に汗）ううう・・・やだ。痛い」

真宵「ね、先生に言つてトイレに・・・」

ミツミ（苦しい小声）絶対無理い。授業中にお手洗いなんて恥ずかしすぎる。死んじゃうう」

真宵「だって、でも・・・どうしよう・・・」

狼狽する真宵、拓馬となんとなく目が合う。拓馬、突然挙手して起立。

拓馬「先生！僕、おならが満タンです。ぷ

ーぷー噴射して大気圏を突破しそうなので、ウンコしにいつていいですか？！」

ミツミ「・・・エ・・・」

拓馬、教壇に走り、宮本のミニキーボードを掻き鳴らし、即席の歌「ウンコマン・ソング」を熱唱する。

拓馬「お腹の痛い子超特急

便秘のあの子は各駅停車

みんなタイミング違うけど

みんなぜったいウンコするブヒ！

口には上水道つながって

おしりは下水道つながって

キレイとキタナイ行ったり来たり

清く穢れていきましよう

今日もウンコマン明日もウンコマン

石けんで手を洗って、手を繋ごう

ブブウウ！」

宮本「ど、どした？落ち着け、ホカリ…」

拓馬「さあ、みんなあ、手を繋ごうよー！」

生徒達「うわあー」「きったねえー」

両手を広げて走り回る拓馬。大騒ぎ

で逃げる生徒達。ミツミ、騒ぎに乗

じて教室の外へ出て、トイレに走る。

真宵M「変人っていうより、もはやヘンタ

イの域？まあ、そのおかげっちゃおかげ

で、お腹がピンチだった女の子・今思

えば、その後一瞬だけ私の親友となる中

野ミツミね。彼女は無事にホカリタクマ

から逃げるフリしてトイレに駆け込めた

訳だけど」

### ○小学校・階段・踊り場（放課後）

雨の音。真宵、階段の踊り場にいる。

拓馬、傘を回しながら戻って来る。

拓馬「やっぱり降って来た」

真宵「何十本もあったたでしょ？ビニール傘。

よく私のわかったね」

拓馬「わかるよ」

真宵「なぜ？」

拓馬「じゃあ雨の断面の観察してくる」

真宵「あ、待って。学級新聞の・・・なっち

やったじゃん、一応、チームに」

拓馬「うん。なった」

真宵「適当でいいけど、何の記事、書く？」

拓馬、バツとビニール傘を広げる。

拓馬「じゃあ、落下する雨の観察記録は？」

真宵「はい？」

拓馬「雨がどこからどんな旅をして、ここに辿り着いたのか、水滴の断面から積分してみるといふのはどう？」

真宵「(ドン引き) セキブンね。ま、それもいいんだけど・・でもままずくない？だってその、国家機密なんでしょ？」

拓馬「あ、そうか(考え込む)」

真宵M「冗談ではない。ド変人に巻き込まれて私までド変人にされてたまるか。空気の方がまだましだ」

拓馬「そうだなー。じゃあ函館から台湾まで往復の旅をする水色の蝶々の話は？」

真宵「・・ハイ？」

拓馬「シータ・パランティカというんだ。

この蝶のものの凄いとこは、函館から台湾へと渡って、東アジアを經由して再び

故郷の函館に戻って来る時には、最初に南に向かった蝶の、孫の世代になつてつてこと。三世代をかけて旅をするってどういうことかわかる？」

真宵「(ついていけず) よくわかんない」

拓馬「(ため息) ねっ、だよねえ。僕なんか全然わかんない。いったいどんな覚悟を決めれば、そんな勇氣が」

真宵「よくわかんないけど、ホカリ君は、雨とか蝶とか、遠くを飛ぶものに興味があるのかな？」

拓馬「うん、そうだね。離れないと、見えなから」

真宵「(どきつ) えっ？それって逆じゃ」

拓馬「シータ・パランティカを観察するなら四季の杜に『道南虫の会』という…」

真宵M「冗談ではない。私は、ド変人にはなりたくない！」

真宵「・・・うーん。私はもうちょい人間から半径1メートル以内の記事のほうが、学級新聞の題材っぽいと思うけど？」

拓馬「人間から半径1メートル以内？」

真宵「ホカリ君は人間には興味がないの？」

拓馬「真宵ちゃんには興味あるよ」

真宵「ハイ?・・・ハ?・・・」

真宵M「おう、コラ、ホカリ、いつから私にそんな馴れ馴れしい口を利く関係に…」

拓馬「北友真宵でしょ？」

真宵「そ、そうだけど、(動揺してなまる) なしてさ、突然、下の名前で」

拓馬「うーん・・・もういいかなーって」

真宵「・・・(ゆっくり)モウイイカナ？」

拓馬「(ニコツ)ワン・チームだし」

真宵M「なに?その満足げな顔。なんどわ、こいつ?なんどわ、こいつ?」

拓馬「じゃあ真宵ちゃんから半径1メートル以内の話をする」と

真宵「はい？」

拓馬「これは僕の想像に過ぎないけど、中野ミツミさんと藤原アヤさんは、今日、真宵ちゃんが学校に来て、少しがっかりしたと思う」

真宵「ハアアツ?!(間)ハアアツ?!」

拓馬「僕がこの推理に至った経緯は・・・」

拓馬、身振り手振りと共に説明をするが、その声は真宵の耳には入らない。

真宵M「私は、ホカリタクマのこの発言を

聴くまで、ミツミとアヤのことを忘れていた・・なのに油断したところをどストレートに思い出させやがって、このやろう！」

拓馬「(話を終え)・・ということなんだ」

真宵「なに？聴いてなかった。なにが言いたいわけ？」

拓馬「つまり、藤原アヤさんは真宵ちゃん  
の悪口を言っていないし、中野ミツミさんも告げ口なんてするはずが…」

真宵「(赤面、激昂して)やっぱり聴いてたなあー？！やっぱり盗み聞きしてたんじゃないかあー？！」

拓馬「どうしたの？急に大きい声。盗み聞

きじゃないよ、聴こえたんだよ」

真宵「それで、憐れみで、話しかけてくれ

てたんだ？空気みたいなみじめな私に」

拓馬「存在感の薄い人を “空気のような” と形容することは科学的に間違っていると…」

真宵「うるせえ！ウンコマン！！」

拓馬「アツ(指差し)アアーツ！真宵ちゃんまでそのあだ名で呼ぶかあー」

真宵「ほつといてくんない？！」

拓馬「もちろんほつといてもいいんだけど、ただ不思議だったから」

真宵「ふ・・なにが？！」

拓馬「三人で仲が良いんだから、三人でワンチームになればいいのになって」

真宵「・・ハアアツ？！」

拓馬「宮本先生が二人組になれって指示したのは、あくまで初期設定であって…」

真宵M「できるかよ?! そんなことが? 私  
は決勝に行けなかったんだぞ?! 親友決  
定戦の準決勝、カツコ、一回戦とも言う、  
カツコと同じ、で惨敗した私のプライドを、  
なけなしのプライドをいったい、なんだ  
と?」

真宵、鼻息を荒げ拓馬を睨みつける。

拓馬「真宵ちゃん?」

真宵M「私、こいつをボロクソに罵倒した  
かったけど、今、ひと言でも話したら」

拓馬「真宵ちゃん? どうしたの?」

真宵M「水が出ちゃう。目から。もう頬つ  
ぺたまで来てる水が。私はその生き恥だ  
けは晒したくなかった」

拓馬「なあに? この間(ま)、今ってどっちが、  
お話のボールを持つてる?」

真宵、拓馬をジッと睨んでいる。

拓馬「じゃあ僕から投げるね。真宵ちゃん。  
どうして(ボールを投げるポーズ) 僕と、  
チームになってくれたの?」

真宵「(深呼吸)・・誰にも言わないって、  
約束できる?」

拓馬「うん。言わない」

真宵「それは、私が・・私が・・」

拓馬「うん。聴いてるよ」

拓馬、ジッと真宵の眼を覗き込む。

### ○穂苺家・庭(秋・夕方)

雨上がり。小さな一軒家の庭先で拓  
馬の父、穂苺康志(42)が七輪で団  
扇を扇ぎ秋刀魚を焼いている。拓馬、  
とぼとぼと帰宅する。

拓馬「・・・ただいま」

康志「雨、上がったな。こらあ今夜、よ  
う見えんで。拓馬（ニヤツ）ラッキーやな」

拓馬「七輪の煙、亀田川まで見えてた」

康志「（パタパタ）くくく、たまらんやろ、  
この炭の香り」

拓馬「普通に煙くてくさいよ」

康志「なんや自分、元気あらへんな。こら  
あ秋刀魚食うて、スタミナチャージせん  
とあかん」

拓馬「サンマ、きらいだよ。ワタ、苦いし」

康志「わかってへんな、ええか、拓馬。世  
界中を飛び回った俺が特別に教えたる。

日本人の心とはなんじゃい？」

拓馬「どうせサンマって言うんでしょ？」

康志「カンテキでな、表面が少おし焦げつ

く程度に焼いて大根おろしを添えて、す  
だちを搾った、函館の旬の秋刀魚・・・こ  
れこそが、ザ・日本人のこころや」

拓馬「サンマは日本近海じゃなくて、北太  
平洋のハワイ付近に住んでる魚だけど  
ね・・・公用語はアロハ」

康志「アホっ（パタパタ）せやからこそや。  
日本では回遊してきた秋にしか獲れへん。  
せやから、むっちゃ貴重やねん」

拓馬「（わざとへたな関西弁）せやねんな、  
むっちゃ貴重やねんな」

拓馬、鼻を吸る。涙が出そう。

康志「なんや、自分、風邪ひいとんちゃう  
んか？いけるか？」

拓馬「ちよっと散歩行って来る」

康志「待て、拓馬・・・なあ、いけるか？」

拓馬「・・・どうかなあ、僕、いけるかな」

康志「どないした？・・・言うてみ・・・」

拓馬「父さん、もし僕が不治の病に冒され

てるって知ったらどうする？」

康志「どこのヤブ医者が言うたんや？！俺

がそいつ、どつきまわしたる！」

拓馬「落ち着いてっつてば」

康志「俺が保証したる。拓馬は健康や」

拓馬「僕の学校でのあだ名は知ってる？」

康志「ウンコマンやろ？」

拓馬「うん」

康志「誰かてうんこはする。健康な証拠や」

拓馬「だけど、中には僕のこと、ウンコマ

ンって呼ばない子もいて」

康志「誰や？」

拓馬「北友真宵ちゃん」

康志「ええ子や」

拓馬「だけど今日、うるせえ！ウンコマン！

って思いっ切り言われて」

康志「ええ子やないやん」

拓馬「僕、真宵ちゃんとワン・チームで学

級新聞を作ることになったんだ」

康志「ん？？いまいち話の全体像が見えへ

んな。この話は総じて自分にとってええ

ニュースなん？悪いニュースなん？」

拓馬「両方」

康志「そうか、両方か。うん。ほな、悪い

方から言うてみ」

拓馬「うん、実はね、真宵ちゃん・・・」

康志「なんやなんや？マヨイちゃん、どな

いした？」

× × ×

(拓馬の回想・階段・踊り場)

真宵、拓馬をジツと見詰める。

真宵「誰にも言わないって約束できる？」

× × ×

拓馬「あ、だめだ」

康志「なにがだめや？」

拓馬「誰にも言わない約束したんだった」

康志「んなもん、おとんは勘定に入つたら

んやろ？ ばりばり一親等の親族やんか」

拓馬「なら父さんは、宇宙航空研究開発機

構 JAXA の機密情報、ばりばり一親等

の僕になら言える？」

康志「それとこれとは話がちゃうやろ」

拓馬「本質的には同じことだよ」

康志「なにがホンシ・・はうあつ、秋刀魚、

焦げとるやないかい！」

焦って七輪をふうふう吹いて、団扇を扇ぐ康志。拓馬、黒い煙を見つめる。

○拓馬の回想・階段・踊り場（放課後）

雨の音。真宵の話を聴いている拓馬。

真宵「それは、私が・・不治の病に冒されてるからなの」

拓馬「(シヨック) エ・・」

真宵「詳しくは言えないけど、血液の難病」

拓馬「・・なんて病気？ ・・病名は」

真宵「(伏し目がちに) ごめん。言えない」

拓馬「だから、昨日まで、学校休んでたの？」

風邪じゃなかった・・？」

真宵「普段はね、健康な子と同じように生

活できるんだけど、もしもの時は、また

入院生活に逆戻りだから」

拓馬「・・・そういうことか・・・」

真宵「うん・・・それ考えちゃうと、なかなか友だちとチームになってルンルンってわけには、いかないよね、やっぱり」

拓馬「それで、僕と・・・」

真宵「うん。拓馬なら安心だから」

拓馬「(どきつ) えっ?」

真宵「拓馬、すごい頼りになりそうだから」

拓馬「・・・正直、頼りにされて嬉しいけど、

やっぱりこのこと、正直に先生に話し・・・」

真宵「やめてっ!」

拓馬「でも・・・」

真宵「普通に暮らしたいの・・・せめて、卒業までは」

業までは」

拓馬「・・・わかったよ・・・じゃあ、少しでも具合が悪くなったらすぐ教えてくれ

る?」

真宵「(軽薄な返事) うんうん」

拓馬「そのことは約束してくれる?」

真宵「うんうん。するする、したした」

雨の音。拓馬、きつく唇を結ぶ。

### ○穂苅家・拓馬の部屋(夕方)

分厚い医学辞典を開きパソコンで血液の病気について調べている拓馬。

拓馬「血液の病気って、こんなにあるんだ」

康志、電話の子機を持って入室。

康志「拓馬、電話や。キタトモさんって子

拓馬「えっ?(子機を受け取る)もしもし、あ、

真宵ちゃん」

拓馬、ニヤニヤしている康志を部屋から追い出す。

※以降、カットバックで進行。

○北友家・真宵の部屋（夕方）

ソファでくつろぎスマホで話す真宵。

上機嫌。周りには菓子類が沢山。

真宵「(菓子をむしゃむしゃと食べながら)

拓馬？私、やっとわかった。そういうこ

とだったんだねー」

拓馬「なんの話？」

真宵「ミツミとアヤからの宅急便、届いた、

届いた。もう甘いモンがごっちゃり。っ

たくあやつら、私をプニプニにプニらせ

るつもりかー？」

拓馬「お見舞いの品？それはよかったね」

真宵「なるほどね。そういうことね、そん

で拓馬、がっかりしたと思う」って言う

たわけね。そういう文脈だったのね」

拓馬「うん。二人が宮本先生に『お見舞い

に行きたい』って申し出て『安静にしな

いといけないからだめだー』って禁じら

れてる姿、何回か見たから」

真宵「つたく、ミヤモトオ、かたいんだよ、

頭が。けどさ、拓馬も拓馬だよ？」

拓馬「僕も僕？」

真宵「ちゃんとーそうやって教えてくれた

ら私だつてわかるじゃん、さっきの時」

拓馬「ごめん。宅急便は彼女たちの精一杯

のサプライズだつて思ったから、言葉を

濁して伝えることしか出来なかった」

真宵「かぁー、繊細なやつちゃんー、拓馬

ってばA型？」

拓馬「知らない。調べたことないから」

真宵「ええっ？なにそれ。入院とか手術と

かしたことはないの？一度も？」

拓馬「(苦笑)ないんだ。ごめん、健康で」

真宵「なに謝ってんの？素ン晴らしいこと

でないかー。でさ、学級新聞の件ね…」

康志の声「拓馬あ、そろそろ通過すんで」

拓馬「ごめん、真宵ちゃん、また学校で」

真宵「なあに？さつきから謝ってばかり。

変な拓馬」

上機嫌で電話を切り、ベッドにダイ

ブする真宵。またすぐに電話をかけ

る。

真宵「あ、もしもし、ミツミ〜?!」

屋根に登っている康志と拓馬。

康志「どや、真宵ちゃん、どないした？」

拓馬「お菓子食べてげらげら笑ってた」

康志「電話しながらか？行儀の悪い子やな」

拓馬「(真宵の口調を真似て)素ン晴らしい

ことでないかー」

康志「なんやねん？それ」

空を見上げる拓馬。遥か上空に小さ

く宇宙ステーションが光っている。

拓馬「あれだね？」

康志「せや。国際宇宙ステーション『みらい』

や」

拓馬「うわ、くつきりだ。くつきり見える」

康志「地上数百キロ上空を回つとるさけな、

こっちは日が暮れとつてもあつちにはま

だ太陽が当たつとんねん」

### ○穂苅家・屋根の上(夕方と夜の境目)

夕暮れ時。灯る明かり。函館山の稜線。

拓馬「クーパーさーん！あなたのバディは庭でサンマ、焦がしてますよー！」

康志「クーパーはーん！あんさんのバディのボンは初恋に身を焦がしてまつせー！」

拓馬「（見上げたまま）向こうからはどんなふうに見えるの？」

康志「スルーか。普通やったら自分、やめてよ、そんなんじゃないってば、言うて……」

拓馬「（見上げたまま）ちよつと静かにしてもらってもいい？このわずか数分をずつと楽しみにしていたんだから」

康志「えらいすんません」

拓馬「・・・ご無事な帰還を・・・」

康志「クーパーから見えとんで、今の拓馬」

拓馬「そうなの？」

康志「夕暮れの函館は、どえらい幻想的や。」

オレンジに瞬く町の灯に、あゝ夕餉時やなあって人の温もりを感じんねん」

拓馬「・・・そうなんだね・・・」

康志「町の明かりが、キャンバスに描かれたアートやとしたら、雲は言うたら額縁や。な。運慶快慶かってこんな彫れんつちゅう出来栄えのフレームやな。んでオーロラはアレや、絵を包むラッピング材や」

拓馬「いないよ、オーロラを、ラッピング材なんて言う宇宙飛行士」

康志「ただし世界一ゴージャスなラッピング材やけどな」

拓馬「・・・父さんは、宇宙から人間ばかり見てるんだね」

康志「当たり前前じゃい」

拓馬「・・・今度はいつ帰れるの？」

康志「さ、そろそろ栗ご飯が炊けた頃やな」

拓馬「(ため息) あからさまに話そらすの、

やめてもらっていい？」

### ○小学校・教室(放課後)

生徒達が下校していく。拓馬と会話

中の真宵、植木鉢を隠し持っている。

真宵「ふっふっふ、昨日さ、出張で礼文島

に行ったお父さんがガーデニング好きの

お母さんにお土産を買って来たのだ」

拓馬「なんの話？」

アヤとミツミがドアから真宵を呼ぶ。

アヤ「真宵、お待たせ。帰ろ」

真宵「ごめん、私、用あるから先帰ってて」

アヤ「え、けど、今日、チーズオムレット、

食べ行く約束・・・」

ミツミ「いいよ。行こう、アヤちゃん」

ミツミ、アヤの袖を引っ張って去る。

真宵、植木鉢を勢いよく机に置く。

真宵「ジャァーン！見て。この風船トウワ

タつて高山植物のここ、葉っぱのどこ」

植物の葉に、蝶のさなぎが見える。

拓馬「！ シータ・パランティカのさなぎ」

真宵「ふっふっふ、ぴーすぴーす」

拓馬「・・・凄い・・・」

真宵M「拓馬、息を殺して見入ってた。私、

すこぶる満足して、植物を学校まで運ん

だ重労働が報われた気がしたさ。なのに

拓馬「つたら」

拓馬「この子、ここに置いといたらだめだ」

真宵「ええっ？なんでえ？」

拓馬「蝶の羽化は日の出の時間帯って太古の昔から決まってるから」

真宵「そうなの？」

拓馬「うん。美しい時間は短いんだ」

真宵「なになに？突然かつこいいさ、今」

拓馬「って父さんがよく言ってる」

真宵「ほほう。お父さん、何をしてる人？」

拓馬「厳かな羽化の儀式は、僕らの登校時間を待つてはくれない。この子、僕ん家に連れて行ってもいい？」

真宵「いいけど、私も行くよ」

拓馬「えっ？」

真宵「当然でしょ。学級新聞の観察だもん」

拓馬「でもそんな、男子の家に外泊だなんてお家のひとが許すだろうか？」

真宵「(拓馬を叩き爆笑) やめてよ、拓馬、

なに考えてんの。ぼつかじやないの？」

拓馬「それに・・・びよ・・・」

真宵「びよ？・・・なに？」

拓馬「病気の症状が悪化したら」

真宵「・・・(間) だーいじょうぶ。今、安定してるし薬もちゃんと持って行くし」

拓馬、まっすぐに真宵を見詰める。

真宵「(伏し目がちに) 大丈夫だって・・・」

拓馬「・・・うん・・・わかった。じゃ、僕、

家までの地図描くね。亀田川の新川広路沿いだから、すぐわかると・・・」

真宵「待つて待つて。まさか迎えに来てくれない気？」

拓馬「えっ？」

真宵「私、これでも一応、女の子だよ。暗い夜道で怪しいおじさんにコートを全開

されて、全裸だったらどうするの？」

拓馬「外泊は大丈夫でも、そういうのは心配なんだね」

真宵「あたりまえ」

拓馬「わかった。僕、迎えに行く。もし全

裸のおじさんがいたら」

真宵「いたら？」

拓馬「キーツク！」

真宵「うふ。頼りにしてるぜ、相棒」

真宵、ランドセルから筆記具を出す。

真宵「じゃあ私も家までの地図、描くね。

ええと、学校を出たら弥生坂を南へ進み

まして、聖マリア教会を過ぎたら、右に

曲がり児童公園が見えたら・・・」

真宵、ノートに絵入りの地図を描く。

拓馬「真宵ちゃん、地図描くの上手だね」

真宵「んふ。実は絵を描くの好きなのだ」

拓馬「どうして、こんなすごいことが出来るんだらう？」

真宵「ちよっとおおげさじゃね？拓馬だって描けるでしょ？地図」

拓馬「うん。だから僕たちってほんとすごいなつて」

真宵「えっ？」

拓馬「だって空から見たことないでしょ？」

真宵「・・・どういうこと？」

拓馬「僕たち人間は、空から見ると、この

街がどんなふうに見えるかを知ってる。

小学校、教会、公園、これまで一度も行

ったことがない位置から覗いた地図を描

くことができる」

真宵「あ、言われてみれば、そうだね」

拓馬「それは、きつと、僕が思うに・・・」

真宵「・・・なあに？教えて」

拓馬「前に見たことがあるからだと思うん

だ・・憶えていないだけで、雲の切れ目から覗いた景色を知っているんだよ」

真宵「憶えていないことを、知ってるの？」

拓馬「うん。ちようど、北へ北へと見たこ

ともない故郷を目指すシート・パランテイカのように。誰かに教わったことじゃないけど、疑いを持ったこともない」

真宵M「綺麗な目・・・」

拓馬「だからね、世界の七不思議って言われてるナスカの地上絵だって、ほんとは

ちつとも不思議じゃなくて・・・」

### ○北友家・玄関・外観（夜）

北友家まで真宵を迎えに来る拓馬。

### ○函館・海沿いの道（夜）

拓馬と真宵が歩いている。コートの中に遭遇し、真宵をかばうように立つ拓馬。男性はコートをの下にスーツを着ている。二人、安堵する。

### ○函館・教会の坂道（夜）

教会を見上げ角を曲がる真宵と拓馬。

### ○穂苅家・玄関・外観（夜）

康志に歓待される真宵。

真宵M「なんなのだろう？この高原のイチゴミルクのような心地よさは・・・拓馬が

私に一所懸命、へんてこな話をしてくれ  
る。私はそれが嬉しくて楽しくて、でも  
同時に、なんだろう？ひりひりと、奥の  
ほうを引つ搔かれるような、何にも苦し  
くないのに、どこか息苦しいような、こ  
の心地よい時間が、このままずっと続け  
て欲しいような、あゝ、そうか。要するに」

### ○穂苺家・リビング（早朝）

さなぎの観察をしている拓馬と真宵。

康志、珈琲のマグカップを運んで来  
る。真宵、無意識に発声する。

真宵「要するに、美しい時間は短いのだ」

康志「・・・美しい時間は短いのだ？」（笑）」

真宵「（びくつ）はい？私ってば今なんか、

口走ってました？恥ずかしいこと」

康志「あ、いえいえ、どないですか？そろそ  
ろ眠気が襲ってきてるんとちゃいます  
か？」

真宵「いいえ、全く眠気ないです。私の辞  
書に「眠気」という文字はないです」

康志「さいでつか。けどよかったら夜明け  
のコーヒー、召し上がってください」

真宵「（感激のあまり囁む）あいざいます、  
お父さま（ゴクつと飲む）あつ・・・」

康志「どないですか？真宵ちゃん。生まれ  
て初めての、徹夜のお味は」

真宵「なんだろう、苦いけど苦さの中に・・・」  
拓馬「来たよ、真宵ちゃん」

真宵「はいっ・・・はいっ・・・」

康志、カーテンを開く。早朝の陽射  
しが高山植物のさなぎを照らす。

拓馬「見て」

緑色だったさなぎが透明に透けて、  
翅の色や模様が浮かび上がる。

拓馬「さあ、はじまるよ、羽化が」

真宵「うん・・・」

康志「一夜限りの神秘の宝石ってやつやな」

さなぎの殻から姿を現す蝶の幼虫。

スケッチブックを抱え、一心不乱に

スケッチをする真宵。

真宵「・・・あゝ、滑り落ちちゃう」

拓馬「(蝶に人差し指を伸ばし語りかける)

捕まって。大丈夫だからね、ゆっくりゆ

っくり・・・」

蝶がよちよちと拓馬の指を伝う。真

宵も人差し指を伸ばし、拓馬の指に

継ぎ足して、蝶が進んで行く道を作

る。

真宵「ねえ、これ、銀河鉄道だよ、ウチら  
の指を滑走路にして、星の架け橋、渡っ

ていきなね、シート」

拓馬、窓を開ける。真宵、蝶を窓へ。

拓馬「さあ、飛んでお行き、南へ南へ・・・」

シート・パラソル、空へ飛翔。

真宵「バイバイ！バイバイ！元気でねえ！」

康志「きつとまた会えんで」

真宵「え？」

康志「幼虫の時代に人の指に乗ったことが

ある蝶は、人間を恐れない。真宵ちゃん

のことを憶えたからや」

真宵「なんて、ロマンチックな・・・」

康志、スケッチブックに描かれた蝶

が羽化する様子を描写した絵を見る。

康志「おゝ、真宵ちゃんの絵、ええなあ」

真宵「ほんとですか？」

康志「あゝ、ええもん持つとる。一瞬の永

遠をよう捉えとる」

真宵「一瞬の永遠・・・」

康志「ほな朝飯にしよか。おとんが炭火で」

拓馬「(嫌な予感)サンマ？」

康志「シャウエツセン、炙っちゃる」

拓馬「いやったー！」

真宵「シャウエツセンですとー?! 私の好

物ではないですかー！」

康志「ほな、楽しみにしとき。炭火は反則

やで。外はカリカリ、中はジューシーっ

ちゅうやつや」

真宵「わおお。そしたら私、包丁でハッシ

ユタグの刻み、入れていいですか？」

拓馬「真宵ちゃんはお客さんなんだから座

ってて」

真宵「何を言うか。準備の時間が一番ご馳

走なのに」

康志「真宵ちゃん、ようわかっとるわ」

笑い合う真宵と康志。拓馬も楽しそ

う。

× × ×

食器を運んだり食卓の準備をする三

人。

× × ×

炭火で焼いたソーセージを見せる康

志。

ばってんの焦げ目。真宵、感激する。

× × ×

食卓に座り、朝食を食べ始める三人。

真宵M「私、ついてる。学級新聞なんて面倒なだけだったのに、拓馬とワン・チームになって、生まれて初めて一緒に日付変更線を超えて、シータの旅立ちを見送って、さらにはお父さま特製の炙りシヤウエツセンモーニングまで。(へたな関西弁)ほんまラツキーな6年生のある日や」

康志「どや、ゆかりのふりかけ、いつてみよか」

拓馬「やだよね、そんなしよっぱいの。のりたまだよね」

真宵「(挙手して)北友真宵、是非、ゆかりを所望する所存です」

康志「ええ度胸や、ほんだら、大人の世界

へウエルカムやでー、真宵ちゃん」

笑って楽しく食事をする三人。

真宵M「だけど私は、ばかでお調子者の子供だったから、本当は何もわかってなかった・・あの完璧な、完璧過ぎる時間は、私にとってラツキーな6年生のある日、なんてそんなレベルじゃなくて、その後ずっと、幾度となく思い出す、一生で一番特別な、一瞬の永遠だったってこと・・」

### ○小学校・教室(放課後)

貼り出された学級新聞に集まってる生徒達。拓馬、取り囲まれて居心地が悪そう。真宵、アヤに肩を叩かれ、教室の外へ出てゆく。

真宵M「学級新聞に発表された絵・私、文・拓馬のシータ観察日記は校長先生から銅賞の賞状をゲッツ。けど銅賞って微妙で

すよね〜？”なんて拓馬のお父さまに報告に行こうと思つた放課後、私はミツミとアヤに呼び出され、突然の尋問を受けた」

### ○小学校・階段・踊り場（放課後）

ミツミが立つている。思い詰めた顔。

アヤが真宵を連れて来る。

真宵「なになに？ミツミ？シリアスな顔して・・・どした？どした？」

アヤ「真宵、穂苺ちゃんと付き合ってるの？」

真宵「えっ（間）ええー？なにそれっ？ないないないない！私と拓馬は・・・」

ミツミ「（瞳に涙を溜めて）付き合ってるんならいいの。真宵ちゃんと拓馬くん、すごいお似合いだしさ。だけど、もし付き

合っていないなら・・・」

真宵M「そこで涙腺が決壊。ミツミダムが放流を開始した」

アヤ「付き合っていないなら、ミツミの真剣な恋、ウチらで精一杯、背中を押してあげようよ？ねっ、真宵」

真宵M「なっ？なにいー？！」

アヤ「ミツミ、新学期の頃から、もうずっと穂苺くんに片想いしてるんだよ」

ミツミ「こないだ先生に“自分の好きな人を見なさい”って言われた時、私、拓馬くんのこと、チラッと見ちゃって」

真宵M「なんと。ミツミのあの曖昧なチラ見は私ではなく拓馬を見てたか」

ミツミ「だって、だってさ、名前も知らない太った少女私が、お腹痛くて超ピンチ

の時・・ウンコマンなんて恥ずかしい汚名を着せられてまで、名前も知らない私を、助けてくれたんだよお、拓馬くん」

真宵M「なんとお。ミツミの中ではそういうストーリーが出来上がっていたのかあ・・そういうことかあ。そりゃあ好きになっちゃうよね。そしてばかでお調子者の私は」

ミツミの肩を力強く抱く真宵。

真宵「わかった！橋渡しする！大船に乗ったつもりで私に任せといてー！」

ミツミ「真宵ちゃん」

アヤ「そうこなくっちゃ！真宵！」

真宵M「なんて、したこともない恋のキューピッド役をへらへらと買って出た挙げ

句」

ミツミ「ありがとうね！」

真宵M「と、抱きつかれたミツミの涙が私のラグランTシャツを濡らすと、理由のわからない罪悪感に押し潰されそうになって、力なく弥生坂を登った・・そしたら、なんと家の前に」

二人に手を振り、帰途に着く真宵。

○北友家・玄関・外観（夕方）

拓馬、立っている。高山植物の植木鉢を持っている。

拓馬「お帰り」

真宵「拓馬・・どしたの？急に」

拓馬「これ（植木鉢）真宵ちゃんのお母さんにお返ししようと思って」

真宵「それはわざわざ、どうもどうもね」

拓馬「でね、もしよかったら、今夜、うち

に晩ご飯、食べに来てくれない？」

真宵「えっ？」

拓馬「父さんが、銅賞のお祝いバーベキュー

ーパーティヤー」なんて盛り上がって、

食材いっぱい買い込んで来ちゃって」

真宵「うわ！それは・・・」

真宵M「行きたい。すつごく、行きたい・・・

けど・・・でも・・・」

真宵「でも、もう、そういうの、あんまり」

拓馬「・・・えっ・・・」

真宵「もう学級新聞も終わったし、その・・・

チームも、か、解散したわけだしさ」

拓馬「・・・解散・・・そうか・・・そうだよね。

ごめん。突然。迷惑かなとも思ってたんだ

けど、うちの父さん、また長いこと、居

なくなっちゃうから、つい」

真宵「・・・えっ？なにそれ？どういうこと？

お父さま、どこに・・・」

家の中から真宵の母、芳江(38)、登場。

芳江「あら、あなたが拓馬くん？」

真宵「(振り向いて) きゃっ？！なに？お母

さん、もう急に出て来ないですよ」

芳江「拓馬くんなのね？！」

拓馬「はい、穂苺拓馬と申します。この度

は(植木鉢を差し出して) 貴重な研究資

料をどうも有り難うございました」

芳江「まあ、なんて礼儀正しい子」

真宵「もういいから、あっち行ってってば」

家の中から祖父、耕三(68)も登場。

まだこの頃は耳が遠くなっていけない

様子。

耕三「おい、上がってもらったらどうだ？」

真宵「おじいちゃんまで、もう、なに？」

耕三「孫が大変お世話になっておるそうで」

芳江「ほんと」

拓馬「いえ、そんな。こちらこそです」

耕三「拓馬くん。君は細いけど体幹がいい

な・・・なんぞ運動でもしとるのかい？」

拓馬「いえ、そんな。毎朝、ランニングし

てるくらいで」

耕三「ほほう。それはいい」

芳江「いいわあ。ね、拓馬くん、よかった

らそのランニングにウチの真宵も……」

真宵「ちよつともうやめてってば」

芳江「あら、いいじゃない？」

拓馬「いえ、それは、だめです」

芳江「えっ？・・・どうして？」

拓馬「どうしてって、その、もしもの時に」

耕三「なんだな？その、もしもとは？」

真宵M「まずい。この流れは非常に」

拓馬「(芳江と耕三に) あの、僕、うかがっ

てます、病気のこと」

真宵「拓馬っ、ちよつと……」

拓馬「だから近くにいるときは、ずっと気

をつけて見てたいんですけどランニング

は」

耕三「病気？はて？なんの話ですか？」

ちの真宵はいたって健康だが？」

拓馬「・・・エツ……」

真宵M「あゝ・・・もうだめだ……」

芳江「サボり好きのインドア派で困っちゃ

うの。ビシバシ鍛えてやって欲しいわ」

拓馬「・・・真宵ちゃん……？」

真宵「・・・えへ、ごめーん・・・あれ・・・嘘」

拓馬「!・・・嘘・・・」

真宵「うん、まあ」

拓馬「どうして?」

真宵「どうしてって・・・なんだろ?ノリ?」

拓馬「のり?」

真宵「いちいち繰り返さないでくんない?」

拓馬「え・・・」

芳江「ちよつと真宵、あんた、どしたの?」

真宵「アンタがあんまりしつこく色々聞いてくるからさ、なんかその場のノリで、

だつてしつこいんだもん、アンタ。直し

た方がいいと思うよ、そういうしつこい

ところ!」

拓馬「・・・そうだったんだ・・・嘘か・・・」

真宵「だから、そう言ってるでしょ?」

拓馬「・・・嘘とは、思わなかったな」

事情がわからないまま、戸惑って顔

を見合わせて、うろたえる芳江と耕

三。

顔をそむける真宵。拓馬、立ち去る。

### ○函館・俯瞰（夕方〜夜〜朝〜昼）

カメラ、二人から離れて空へ浮上し

雲間から覗いた函館の街の俯瞰へ。

※ここまで、2015年。

俯瞰の函館が、タイムラプスのよう

に夜景になり、日が昇って朝になり、

を繰り返す。

真宵M「あの時、拓馬、どんな顔をしてい

たんだろう?私は、怖くて、寒くて、自

分の心臓の音がうるさくて、ミツミに悪

くて、その他、百万個の言い訳で頭がぐるぐるして、やっと顔を上げた時、もう拓馬の姿はなかった・・その日から卒業まで、拓馬と口を利くことはなかった」

やがてカメラはゆっくり史跡五稜郭跡の近くの高等学校へ近づいていく。

### ○高校・外観・通学路（秋・朝）

T：『2019年（4年後）』

黄金色の銀杏並木を通学する北友真宵（16）。後ろから元気に走って来るクラスメイト、吉田文菜（16）。

文菜「北友さあん、おっはよう！」

真宵（小声で）あ・・（会釈）・・えと」

文菜「・・吉田だってば（苦笑）もう二学期だから。いい加減、名前覚えてって〜」

真宵（小声で）・・あ、うん」

文菜「英語の小テスト、予習した〜？」

真宵「・・小テスト・・あるんだっけ・・」

文菜「・・あ、もういい。じゃね・・あつ！  
恵ちやあん、おっはよう！」

文菜、女生徒の集団に駆け寄り、染しげに談笑する。真宵、一人で歩く。

### ○高校・渡り廊下（秋・放課後）

渡り廊下を歩く真宵。サッカーボールが飛んで来てぶつかると。画材を落とす真宵。

サッカー部員の声「悪い！大丈夫かあ〜？」

真宵、小さい会釈。画材を拾う。

サッカー部員の声「よお、ボール、こつちに戻してくれよ〜」

真宵、ボールを放置して立ち去る。

野田「(ため息) もういいよ。続けて」

真宵、ぼおーつと窓の外を眺める。

### ○高校・美術部・部室(秋・放課後)

真宵、イーゼルの前で顧問の野田

ている女生徒たち。

(40) に指導を受けている。

女子1「あ、いたいた！噂の転入生ボーイ：

野田「北友の絵ってそこそこ上手いけど、

うわあ、イケメンだ」

何を描きたいのか伝わって来ないんだよ

女子2「あの子？ああー、ほんと可愛い」

な、・・・これは、何が描きたかったわけ？」

なにげなく窓の外を見下ろす真宵。

真宵「・・・あ、そういうのは特に」

× × ×

野田「ないのかよお・・・そんなんで、なん

校庭を下校してゆく男子生徒。

で美術部に入ったんだ？」

男子2の声「おい、拓馬、待てよー」

真宵「・・・」

呼ばれて振り返る穂苅拓馬(16)の姿。

野田「・・・なんかあるだろ？強烈に描いて

× × ×

みたいと思ったモチーフとか、人に褒め

美術部の窓際。ガターンツ。イーゼ

られてすごく嬉しかった成功体験とか」

ルを倒し、勢いよく立ち上がる真宵。

真宵「・・・特に・・・」

女子1「北友さん？」

女子2 「なに？どしたの？」

真宵 「すみません。なんでもないです」

真宵、窓から拓馬を凝視する。

× × ×

勢いよく走り出す拓馬。

拓馬 「じゃあなー！また明日な。違うって。

バイトだよ。そんなんじゃないって。そ

いじゃあなー」

女子グループが、拓馬を指差し騒ぐ。

校門を駆け抜けて消えてゆく拓馬。

真宵、ジッと見ている。

### ○高校・玄関・室内（秋・朝）

真宵、周囲をきよろきよろと見なが

ら下駄箱を開ける。その背後をビュ

ッと拓馬が走り過ぎてゆく。

女子3 「穂苺くうん、お早う」

拓馬 「やあ、おはよ」

男子2 「お前っていつつも走ってんな」

拓馬 「ほっとけって（笑）」

真宵、拓馬を見る。拓馬、真宵を見

ずに立ち去る。真宵、靴を下駄箱へ。

真宵 「・・そりやそうだよね」

同級生の水島智香（16）が、登場。

智香 「なにがそりやあそうなの？北友さん」

真宵 「・・なんでもない」

智香 「北友さんって、ほんと何考えてんの

か謎だよねー」

大きな足音がして、松野井敏也（18）

が登場。鋭い眼光。強靱そうな体躯。

松野井 「（ビリビリと轟く声）一年。ホカリ

タクマ、いるかあー！」

智香「ひっ」

真宵「・・・」

松野井「ホカリタクマア、今すぐ、来い！」

一年生、萎縮して玄関が静まり返る。

廊下から響く足音。拓馬が現れ、松

野井の前へ。真宵、拓馬を見ている。

松野井「お前か」

拓馬「はい。穂苺拓馬は僕ですが」

松野井「三年の松野井だ。俺のことは知っ

てるな？」

拓馬「はい」

松野井「どう知ってる？」

拓馬「体育倉庫の西側の鉄の扉に、拳の跡

を付けて、開かずの扉にした先輩と」

真宵「！」

松野井「違う。俺ン家の職業だ」

拓馬「知りません」

松野井「銭湯だ。堀川町の松野井湯」

拓馬「それならよく知っています。宮造り

の瓦屋根で、富士山のタイル絵が見事な

銭湯です」

松野井「そうだ。ちなみに女湯のタイル絵

は花鳥風月だ」

拓馬「そうですか」

松野井「見たことあるか？」

拓馬「ありません。男なので」

松野井「ところが昨日の夜、我が校の一年、

ホカリタクマという男子生徒が女湯を覗

いていたという目撃情報が俺の耳に入っ

た」

一年生徒たち、ざわざわと動揺する。

真宵、拓馬を見ている。

松野井「騒ぐな！」

一同、沈黙。緊迫する空気。

松野井「ホカリ。お前、覗いたか？」

拓馬「いいえ」

松野井「なら何故、目撃情報がある？」

拓馬「わかりません」

松野井「住所は？」

拓馬「堀川町1丁目四番地です」

松野井「近いな」

拓馬「近いけど覗いてません・・・穂苺拓馬

という名に賭けて」

松野井「お前の名前？・・・それがなんだ？」

拓馬「死んだ後に残るものです」

松野井「俺にわかるように言え」

拓馬「はい。一説によると、動物の数え方

は死んだ後に残るもので決まっている、

と。牛は一頭、蝶なら一羽、サンマなら、

一尾。そして、人は」

松野井「二名か」

拓馬「はい。僕は、僕の死んだ後に残るもの：

名前に賭けて、先輩のご実家の女湯を覗

いています」

松野井「そうか・・・一年に聞く。穂苺拓馬

は覗きをするような男か？」

真宵「(バツと手を上げて) しません！」

智香「ちよ、北友さん」

拓馬「・・・」

拓馬・・・真宵を見る。

真宵「(震えながら胸を張り) しません」

松野井「お前、名前は？」

真宵「北友真宵です」

松野井「そうか。(拓馬に) 死んだ後に残る

ものに賭けて、か。その言い方、通用する相手としない相手がいるぞ」

拓馬「はい」

松野井「俺には通用した。邪魔したな、穂

苺拓馬」

拓馬「失礼します」

松野井、去っていく。真宵、その場

にへたり込み、智香に支えられる。

智香「北友さん、大丈夫？」

拓馬「・・・」

拓馬、真宵を一瞥し、歩き去る。生

徒達が騒ぎ始める。

女子3「なに言ってるのよ？穂苺くんが覗

きなんてするわけないでしょ」

男子3「けど、あいつン家、堀川町だし」

智香「ねえねえ、北友さんって、穂苺くん

と知り合いなの？・・・どんな関係？」

真宵「・・・小学校が同じという関係」

智香「あゝそれだけ？」

真宵、立ち上がり、教室へ向かう。

真宵「・・・」

× × ×

校舎に差し込む陽射しの向きが変化

し放課後のチャイムが鳴る。真宵、

走って現れ、下駄箱の陰に身を隠す。

真宵（小声）小学校が同じという関係・

それだけだけど・・・」

拓馬、クラスメイトと共に登場。

男子2「たまには遊び行こうぜって」

拓馬「ごめん。バイト」

男子2「んなこと言って、女だろ？」

拓馬「そんなんじゃないって。そいじゃあ

なー！」

走り去ってゆく拓馬。を追って走ってゆく真宵。

男子2「(驚く)なんだ?あの子」

○函館市電・車内(秋・夕方)

スマホを熱心に操作している拓馬。少し離れて柱に隠れて拓馬を見ている真宵。

アナウンス「次は堀川町、堀川町」

市電が停車すると同時に、駆け降りでゆく拓馬。慌てて追う真宵。

○函館市内(秋・夕方)

拓馬、スマホを凝視しつつ、走り止まったりを繰り返す。真宵、電

柱の陰などに隠れ、尾行する。

× × ×

拓馬、公民館の壁をよじ登り、塀の上を歩く。真宵、下の道を追いかける。拓馬、塀から落下しそうになる。

真宵「(思わず発声) あっ！」

拓馬、バランスを取り持ちこたえる。

真宵「(安堵。小声)・・・ぶないよ、もう。歩きスマホ禁止っ」

× × ×

拓馬、塀の奥に飛び降りて姿が見えなくなる。真宵、慌てて下の道を塀伝いに回り込んで追いかけてゆく。

○松野井湯・外観(秋・夕方)

真宵、走って来る。松野井湯がある。

裏口に拓馬が立っている。

拓馬「・・・」

真宵「(小声) 松野井先輩の、銭湯・・・」

真宵「屋根の隙間から女湯を覗く？スマホ

拓馬、宮造りの瓦屋根をボルダリン

で盗撮する？それじゃ、松野井先輩の疑

グの要領でよじ登って行く。真宵、

惑、まんま凶星じゃん。拓馬は、いつか

泣きそうになる。真宵、Uターンし

らブラック拓馬になったの？」

て帰ろうとするが、踏みとどまって、

拓馬「・・・ブラック拓馬ってなに？」

拓馬を睨む。

真宵「質問してんのこっちだってば！」

拓馬「(スマホを見て) 西北西・・・東南東」

拓馬「ひとのこと、尾行して覗き見するの

真宵「(大きく息を吸い込んで)・・・拓馬！

はホワイト？」

なにしてんのお？！思春期の、せ、性欲

真宵「(カアツと赤面)・・・帰る！」

がたまっちゃってんのおー?!」

拓馬「えっ？」

拓馬、屋根の上でゆっくり振り返る。

真宵「なんでそんな嫌味っぽいこと言うの？

拓馬「せいよく？」

もう私の知ってる拓馬じゃない！」

真宵「・・・なにしてんのってば・・・」

真宵、立ち去ろうとする。

拓馬「・・・なにをしてるって思った？」

拓馬「絵を描くんだ」

真宵「質問してんのこっちだってば！」

真宵「えっ？」

拓馬「そう、絵・・・とても大きな」

真宵「なんの話？」

拓馬「僕の父さん、憶えてる？」

真宵「おっ・・・(絶句)」

真宵M「憶えてるに決まってんでしょ！泣

くぞ、コラ、私、泣くぞ」

拓馬「父さん、今、空にいて」

真宵「・・・エッ・・・(ぞわっ) エッ」

拓馬「宇宙飛行士だから」

真宵「・・・なにー？！」

拓馬「言ってなかったっけ？」

真宵「言っつてないよおー！」

拓馬「父さんが搭乘してる宇宙ステーション

ンは天変地異に備えて地球を周回してる

んだけど、その軌道が来週、半年ぶりに

南半球から北半球の上空に変わるんだ」

真宵M「ファンキーな大阪弁のお父さま・

そんな人類レベルで偉大なお仕事を」

拓馬「炭火で焼いたサンマが好物なんだよ

ね・・・あのひと」

真宵「はいっ？」

拓馬「でも宇宙ステーションの中で、炭火

は御法度でしょうか？外国のバディに迷惑

かけちゃう(苦笑) だから僕、せめて描

こうかなって」

真宵「さ、サンマを？・・・どういうこと？」

拓馬「(スマホを見せて) これは、出発前に

父さんがくれたスマホ」

真宵「うん」

拓馬「僕が今どこにいるかが父さんにわか

るGPS機能がついてるから、移動した

経路の記録をオンにすれば、衛星画像の

函館にサンマを描けるんじゃないかなって」

真宵「・・・それで、町中を走り回ってたの？」

函館の街をおっきなキャンバスにして、巨大なサンマを描くために？」

拓馬「うん。全長2キロメートルのね。この松野井湯はちょうどサンマの目ん玉」

真宵「へええ」

拓馬「のはず・・・地図と睨めっこした想定

上では、だけど」

真宵「拓馬・・・」

拓馬「GPSはずっと自動で軌跡を記録するから、本番の時は“ひとふで描き”で

描き切らないといけないんだ」

真宵「・・・本番？」

拓馬「というわけで、僕は宇宙ステーション『みらい』が函館の上空を通過する中秋の名月の夜にでっかいサンマを描く。それがさっきの質問の返事」

真宵「・・・なんて、なんて・・・」

拓馬「じゃそういうことなんで」

真宵「えっ？」

拓馬「失礼するね・・・せいじゃあなー！」

拓馬「走り去ろうとする。」

真宵「待つて。拓馬、待つて！」

拓馬「なに？時間ないんだけど」

真宵「サンマ、私も描きたい描く描かせて」

拓馬「・・・どうして？」

真宵「どうしてって・・・その、拓馬は私よ

り遥かに頭いいけど、私はたった一個だけ、拓馬より“ええもん持つとる！”から」

拓馬「えっ？」

拓馬「えっ？」

真宵「そう！絵！絵だけは私のほうが、上手でしょ？そうでしょ？だから手伝わせて」

拓馬「いやあー・・・悪いけど遠慮する」

真宵「ええー?!」

拓馬「すごいハードな作業だし、警察に捕

まるかもしれないし、松野井先輩に鉄拳

でブツ飛ばされるかもしれないし」

真宵「・・私、どんな苦労も平気だから」

拓馬「・・いやあー・・」

真宵M「・・4年と38日ぶりに口を利い

た拓馬のすごく迷惑そうな困った顔。今

にも泣き出しそうな顔をして一緒にいる

男の子を困らせている十六歳の私・・な

んて最悪なんだ・・だけどその時、最悪

のちっぽけな私に・・」

カメラは蝶の主観になり、真宵と拓馬を、少し上空からとらえ、ひらひらと揺れながら、ゆっくり近づいてゆく。

拓馬「(蝶を発見して)あ・・」

真宵の頭の上に水色の蝶が着地する。

真宵「なあに？」

拓馬「真宵ちゃんの・・」

真宵「(泣き出す) やつと名前呼んだあ」

拓馬「頭の上に・・動かないで・・」

拓馬、真宵の髪に手を近づける。

水色の蝶々、拓馬の指に乗る。

真宵「あ・・」

拓馬「シータ・パランティカだよ」

真宵「(涙が噴き出る) ああー・・」

真宵M「ちいさいからだの、おおきな奇跡

が舞い降りた」

真宵、ぶんぶんと手を振る。

拓馬「何代も前に、南へ渡った祖先の故郷

拓馬「・・・気が変わった・・・真宵ちゃん」

に長い長い旅をして帰って来たんだね。

真宵「はい」

もしかしたら、祖先の記憶の中にいた真

拓馬「やっぱり、父さんのサンマ手伝って」

宵ちゃんと僕に、もう一度逢うために」

真宵「・・・いいの？」

真宵「涙が溢れ続ける」 ああー・・・」

拓馬「うん。こんな奇跡、見ちゃったら、もう、

× × ×

頼むしかない」

### (真宵の回想。 四年前)

真宵「う、う、嬉しい。有り難う、シータ」

穂苺家で早朝、拓馬の父、康志が真

宵に語りかける。

### ○函館ロープウェイ・車内(秋・夜)

康志「幼虫の時代に人の指に乗ったことが

車窓から見た函館の夜景、ゆっくり

ある蝶は、人間を恐れない。真宵ちゃん

と景色が変わってゆく。車内にいる

のことを憶えたからや」

真宵と拓馬。函館市の地図を広げて

× × ×

いる。

真宵「おかえり・・・お帰りなさい」

拓馬「宇宙ステーション『みらい』が函館

ひらひらと飛び立ってゆく水色の蝶。

の上空を通過する時間は、10月1日の

推定でおよそ23時23分から43分にかけて・・・この20分の間に、サンマのひとふで描き”を完成させる」

真宵「でも昨日の予行演習では40分以上、余裕でかかっているよね」

拓馬「大丈夫。本番は倍の速さで走る」

真宵「無理あるでしょ？自転車使えば？」

拓馬「でも自転車じゃ通れないルートも・・・」

真宵「その時は私が預かって、合流地点で待ってる。そのためのワンチームですよ??」

拓馬「・・・冴えてる」

真宵「それとね、拓馬がこだわってる松野

井湯をサンマの目ん玉にするってプラン

を、一度、根本的に見直してみない？」

拓馬「なんですと？」

真宵、車窓からの夜景に、手で型どったサンマを重ね合わせて説明する。

真宵「簡単に言うのと、こう頭と尾をぐるつと逆さまにするのさ」

拓馬「なんと！（地図を引っくり返して）  
ということは、松野井湯をサンマの尾の付け根に見立てるってこと？」

真宵、ロープウェイの左右の窓を往復しながら説明を続ける。

真宵「うん。そして元々、尾っぽに想定してたロープウェイ山麓駅をクチバシに、開港通り側を背びれライン、高砂通り側を腹びれラインに再設定し直すわけ」

拓馬「・・・なかつたなあ、その発想・・・」

真宵「このプランを提案するメリットは、松野井湯の瓦屋根をよじ登る必要がなく

なることと、公民館の塀をまたぐルート  
を避けられること。これで私有地に侵入  
しないで大丈夫になるし、時間的にも、  
かなりショートカット出来るはずなんだ」  
拓馬「となると、僕ん家は、サンマのワタ  
の部分じゃなくなるわけかあ」

真宵「なんでちよつと嬉しそうなの？」

拓馬「ワタ、苦くて嫌いだもん」

真宵「（小声）よしよし。お主はしつかり、  
可愛いところも健在じゃのう」

拓馬「なに？」

真宵「それで、もし時間に余裕が出来たら、  
亀田川下流方面に、大根おろしとスタヂ  
を描き添える・・・どうかな？このプラン」

拓馬「うん・・・完ぺきだよ。ザ・完ぺきだ」

真宵「えへへ。ひたすら地図を凝視してた

らパキッとサンマが見えてきたの」

拓馬「素晴らしい才能だね」

真宵「ずうつと前に空から見たご祖先様か  
ら受け継いだ才能だね？」

拓馬「（どきっ）・・・えっ？」

真宵「拓馬が教えてくれたこと。私たちは、  
憶えていないだけで、雲の切れ目から覗  
いたこの町を知っている。だから、上空  
から見た絵を描ける・・・そうなんでしょ  
う？」

拓馬「・・・よく憶えてたね」

真宵「あたりまえだよ」

拓馬「・・・明日の朝から、しばらく自転車  
で迎えに行くから、登校前に、サイクリ  
ング付き合ってもらえる？」

真宵「ニューサンマルートの偵察だね。も

ちろんっ」

車窓から見た函館の夜景。

○ロープウェイ・山麓駅・外観（秋・夜）

T…「2019年10月1日」

満月の夜。営業時間が終わりひっそりとした駅前。白い息の真宵。自転車で到着する拓馬。

真宵M「10月1日。晴れ。煌々と光る満

月が、拓馬と私の影法師をつくる。この空の下で、私たちは小さい。だけど、小さくてもちゃんと存在はしている」

拓馬「・・・じゃあ、いこうか」

真宵「拓馬、ひとつ、いい？」

拓馬「なあに？ひとつ」

真宵「私に合わせて、ゆっくりに走らない

でいいからね。私、私（懺悔を込めて）何の問題もなく身体、至って健康だから、死ぬ気でついてく。遠慮なしにぶっ飛ばして」

拓馬「わかった。遠慮なしにぶっ飛ばす」

真宵「（頷く）うん」

拓馬、スマートフォンを空に掲げる。

拓馬「父さあーん！僕のGPS、オンしてよねえ？！」

真宵、自転車に跨る。拓馬、ペダルを踏み込み、勢いよく走り出す。

T…「（0分0秒〜ラップを刻む）」

※以降、真宵と拓馬が歌う歌

『離れないと見えないから』

真宵「海峡渡る青い蝶

北へ北へとまっしぐら

誰かに言われたからじゃなく

疑いを持ったこともなく」

拓馬「銀河を渡る青い船

未来を目指しまっしぐら

君のいる星遠いけど

離れないと見えないから」

真宵「ナスカの地上絵なぜ描けた」

拓馬「描けると信じたから描けた」

真宵「おつきいサンマなぜ描ける」

拓馬「これぞ日本の心やで！」

二人「ああ、ああ、思い出せない夢ならば

なかったと同じなのか」

真宵「身体に眠る忘れもの

未来の誰かが憶えてる」

拓馬「二度と触れ合えなくなつて

離れたとこで見てるから」

二人「誰より大事なあなたから

離れないと見えないから」

### ○国際宇宙ステーション内（同刻）

T…「(0分0秒)ラップを刻む)」

曲の前奏の間、宇宙船のコックピツ

トのタッチスクリーンに、地球の全

景や雲間から覗く函館の夜景など。

操縦席に康志(46)、GPSを起動す

ると函館を映したディスプレイ上に、

線画で絵が描かれてゆく。目を見張

る康志。

### ○函館・街（秋・深夜）

T…「(ラップを刻み続ける。)」

歌が始まる。海の見える坂道を全速力で駆けてゆく拓馬と真宵の自転車。

× × ×

歌が続いている。自転車を飛び降りてジグザグに（魚のヒレの形状に）走る拓馬。自転車にまたがり、合流地点へ向かう真宵。

× × ×

歌が続いている。拓馬、真宵と合流。つまづいて転びかける真宵を、強く抱きかかえる拓馬。二人、自転車へ。

× × ×

歌が続いている。自転車の二人、松野井湯を通過。風呂上がりの松野井、二人に気づき、声をかける。手を振り返す拓馬と真宵。駆けてゆく自転

車。

○国際宇宙ステーション内（同刻）

T…「ラップを刻み続ける。」

歌が続いている。康志が見ている函館のディスプレイに巨大な秋刀魚が描かれ、大根おろしが描き加えられてゆく・・同乗の宇宙飛行士クーパ―（40）も覗き込み、（無音で）歓喜する。康志、叫ぶ。唇が「たくま」と動く。

○函館・空（秋・深夜）

T…「ラップを刻み続ける。」

満月の空に光る国際宇宙ステーション『みらい』彼方の空へ消えてゆく。

T・・(19分58秒で停止する)」

○函館・街・駐車場(秋・深夜)

歌が終わる。二人の自転車到着する。ストップウオッチを止める真宵。

拓馬「(激しく手を振り)父さぁーん!またねえ!またねえ!」

駐車場に寝転がる拓馬と真宵。

真宵M「その19分58秒は、一瞬の永遠だった。全てが一瞬で、同時にスローモーションのように鮮やかだった。私たちは何かに見守られているような感覚に包まれていた。それはもちろん、『みらい』からのお父さまの眼差しにちがいない」

○函館・街・川沿いの道(秋・深夜)

月の明かり。拓馬と真宵、自転車を押して歩いている。

真宵「宇宙飛行士になるって、どんな気持ちかなー」

拓馬「どうかなー。聞いたことない」

真宵「ないんかーい(笑)」

拓馬「父さんは、まじめな話は一つもしないから」

真宵「そうなの?」

拓馬「少しでもまじめな話をしようとする。とすぐに笑いに持っていくこうとする。アレ、大阪弁の人の非常に良くない特徴だよね」

真宵「あはははは」

○国際宇宙ステーション内（同刻）

操縦席の康志、スクリーンに映る地球を見る。全く笑ってない真面目な顔。

拓馬の声「だから僕は近くにいと、父さんが見えない。離れないと見えないから：宇宙にいる時だけよく見える」

真宵の声「えっ？」

拓馬の声「それはきつと父さんも同じ。離れないと僕が見えない」

真宵「離れたら、なにが見えたの？」

スクリーンに映る地球を見る康志。

カメラ、地球のクローズアップに。

拓馬の声「人工衛星から撮影された写真は、

地球の自撮りだって話、したよね」

真宵の声「うん、憶えてる」

拓馬の声「宇宙から見たら、地球も一艘の

小さな宇宙船なわけで」

真宵「宇宙船地球号ってやつだね？」

拓馬「うん」

○函館・街・川沿いの道（秋・深夜）

月が雲に隠れた、暗い夜道。拓馬と真宵、自転車を押して歩いている。

拓馬「だとすれば、有人宇宙開発の目的は、いつか宇宙船地球号の資源が枯れた時に、移住できる星を探すということだ」

真宵「・・・そういうことか・・・」

拓馬「でも人類の技術では、銀河系の端から端まで往復するのに二百万年かかる」

真宵「にひやくまんねん・・・」

拓馬「その時間の壁を超えるためには、世

代をバトンしての長い旅が必要になる・  
ということ、宇宙で生まれて、宇宙で  
死ぬ世代が必要になるんだ」

真宵「・・・宇宙で生まれて、宇宙で死ぬ」

拓馬「怖いよね。故郷を離れ、目的の地にも  
辿り着けない人生。僕に出来るだろう  
か？そんな凄い覚悟が」

真宵「えっ？拓馬？」

真宵、拓馬の顔を覗き込もうとする  
が暗くて、表情が読み取れない。

拓馬「父さんならきつと言うんだろうな」

どや、拓馬、いけるかあ？” って・・・はは、  
どうかなあ・・・僕いけるかなあ」

真宵「拓馬？」

拓馬の声がうわずり、呼吸が荒くなる。  
る。

拓馬「そのこと考えると、僕、恥ずかしい  
けど、怖くて怖くて、立っていられなく  
なるんだ・・・笑っちゃうよね、あんなに  
小さなシート・パランティカは、もうと  
つくに覚悟を決めて、孫の代まで世代を  
賭けて勇敢に旅をしているのに」

再び月が現れ、二人を照らす。拓馬、  
瞳に涙を溜めている。

真宵「・・・拓馬？どうしたの・・・」

拓馬「蝶々は、生まれた時から知っている。  
あの頑丈な翅は、近所を飛び回るために  
授かったものじゃないということ・・・」

× × ×

(拓馬の回想。四年前・穂苺家(早朝))

緑色だったさなぎが透明に透けて、  
翅の色や模様が浮かび上がる。

さなぎの殻から姿を現す成虫のシー  
タ・パランティカ・・よちよちと拓  
馬の指を伝い、真宵の指を作を伝い、  
開け放たれた窓から飛翔する。

### ○津軽海峡上空（日中）

蝶が群れとなり、波の高い海峡を青  
森側から函館に向かって飛んでいく。

拓馬の声「あの翅は、生まれ育った安住の  
地を飛び出して、大地を越え、海峡を渡り、  
地球全体に広がるためにあるんだ、とい  
うことを・・ならば僕ら人間も覚悟を決  
めて人智の限りを尽くして、銀河を渡っ  
ていかなくちやいけないのに」

### ○函館・教会の坂道（深夜）

拓馬と真宵、自転車を押して歩く。

真宵「拓馬？拓馬、どうして泣いているの？  
なにが悲しいの？」

拓馬「僕はね、真宵ちゃん、宇宙飛行士つ  
てそういう覚悟を決めたひとだと思っ  
た。父さんは宇宙から人間ばかり見て  
るって言った。それはきつと、今思えば、  
僕を・・」

真宵「拓馬、どうしたの？泣かないで。人  
類がよその星に移住するのは、ずうっと  
先の話でしょう？」

拓馬「えへへ、そうだね、ごめんね、泣い  
たりして（顔を拭って）・・どうして、離  
れないと見えないんだろう」

真宵「拓馬」

○北友家・玄関・外観（深夜）

拓馬と真宵、立ち止まる。

拓馬「（深呼吸して微笑んで）さあ着いた。

今日は遅くまで本当にありがとう」

自転車に足をかける拓馬。

真宵「待って、拓馬。お願い、教えて。なにが悲しいの？何か私に出来ることない？」

拓馬「真宵ちゃんに出来ること」

真宵「なんかあるでしょ？なんでも言って」

拓馬「・・・じゃあ、時間がある時に、これ、

見てもらってもいい？」

真宵「えっ？」

拓馬、真宵にUSBリーダーを手渡

し自転車を漕いで走って行く。

家から耕三(73)が登場。怒っている。

耕三「真宵！午前様かあー！こんな時分ま

でどこ、ほつつき歩いてた？！」

真宵「（USBリーダーを見ながら）おじい

ちゃん、今そーいうのいいから」

耕三「（耳をそばだてて）なんじゃあ？！」

真宵M「拓馬から手渡されたUSBリーダーには、おとんのビデオレターやで」というタイトルの動画データが入っていた」

真宵、耕三、北友家に入ってゆく。

○北友家・真宵の部屋（深夜）

湯気の立つマグカップを手に、デス

クトップで動画を視聴する真宵。デ

イスプレイに登場する、宇宙ステー

ションのエクササイズルームにいる

康志(46)。

真宵「あ、お父さま！」

康志「拓馬、久しぶりやなあ。どや？いけるかあ？おとんは、ま、ぼちぼちや」

真宵「変わってない」

康志「古くさあビデオレターですまんなあ、おとんな、あのIP電話っちゅんが、どうも性に合わんねや。なんや知らん、拓馬の声聴いたら言いたいこと言えんくなるような気がしてなあ、アナログくナビデオレターで勘弁やでー」

康志、宇宙服のポケットをこそごそとまさぐり、何か探し物をはじめめる。

真宵「お父さまー、拓馬、怒ってましたよ、まじめな話をしようとする、すぐ笑いに持っていくのよくないって…」

※真宵と康志は会話をしてるわけで

はないので、康志は、真宵の台詞を

待たず、自分の間合いで話をする。

康志「(ポケットから写真を出し)あった。

これな、拓馬の写真や」

真宵「きゃ、可愛い。中二くらいの時？」

康志「どや？こんまいやろ。拓馬、今はどんな顔しとるんやろ。全く想像つけへんわ」

真宵「縦にシュツと伸びましたね。私が言うんじゃないですけど、イケメンと…」

康志「どや、真宵ちゃんは元気か？」

真宵「えっ？(どきつ)私っすか」

康志「あのこはええ子や」

真宵「ええ子やないです。不治の病って悪質な嘘ついて、すっかり拓馬に嫌われ…」

康志「ええもん持っとるさかい、離したら、

あかんで」

真宵「・・・お父さま」

康志「どや？もうキスはしたんか」

真宵「ハ？」

康志「キスも、その先も、がつついたらあ

かんで。んでな、誘う時は正直に。これ

鉄則や」

真宵「何を吹き込んでるんですか？エロお

やじですか？」

康志「せやせや、忘れるとこやった。本題

やがな。うん、まあ、拓馬んところにも」

A X A から連絡が行くと思うんやけど、

おとんな、もうそつちには、帰られへん

ねん」

マグカップを床に落とす真宵。

真宵「・・・(ぞわっ) エッ・・・」

## ○国際宇宙ステーション内

エクササイズルームの康志。カメラを設置し自撮りで動画を撮影している。

康志「スペースデブリ、宇宙ゴミちゅう、ごつつい古い、死んだ人工衛星の残骸にぶつかってしもうて、パイロットの輸送に使うソユーズロケットがいかれてもうた：うん、まあ、そういうことやねんな：『みらい』にもごつつい穴、開いたけど、まままま、すぐすぐおつ死んだりせんから安心してな。燃料のうなるまで地球の上空をずーっと回っていられるし食料かって水かって売るほどあんのや。来月、北半球に軌道変わるさかい、函館も見える。ま、言うたら、キホン、今までとな

んも変わらん生活や」

○北友家・真宵の部屋（深夜）

ディスプレイを凝視している真宵。

真宵「・・拓馬」

康志「ほんでな、もう帰られへんってなったら、なんや知らん、永遠ってなんやろなーって考えるようになったわ」

○国際宇宙ステーション内

康志。カメラに向かって話し続ける。

康志「なあ、拓馬、人はいつか死ぬ。生は有限や。けど死かて無限やないで。熱力学の第二法則が、エントロピーの増大を命じるからや。ほんたら、永遠ってなんやろ。俺が思うに、絶えず巡っては繰り返すもの、永劫回帰するものの中に、永遠があるんとちゃうかな・・例えば月の満ち欠けやろ、満ち潮、引き潮の繰り返しやろ、太古の昔から同じリズムを刻む昼と夜の交代、ほんで、雲の切れ目からずーっとお前を見とるおとんの『みらい』や」

○穂苅家・屋根の上（深夜）

拓馬、黒い夜空を見上げている。

康志の声「拓馬、いけるか？おとん、腹減った。もっぺん秋刀魚食いたかったなー」

○国際宇宙ステーション内

康志。カメラに向かって話し続ける。

康志「いや、そんなもんだってええわ。」

いけるなあ？」

○高校・廊下（秋・朝）

秋刀魚やのうて拓馬や、ほんまは拓馬の  
声が聴きたいねん。聴きとうて、聴きと  
うてしようがないんや、けどな、電話を  
かけてしもうたら、俺が俺でおれんくな  
る。思い出すつちゅう行為、あれは自発  
的なもんやない。なんかがトリガーにな  
って、襲われるもんや・拓馬の声を聴  
いてもうたら、会いたいつちゅう想いに  
襲われて、俺、暴れてまうやろお。うら  
うらあ、俺を返せえ言うて

（絶叫）俺を拓馬のところに返さんか  
い！！・言うてな、暴れてもうたら、  
バディのクーパーが難儀するさかい、今  
は、離れたところから見とくわ。いよいよ、  
あかんつちゅう時は、また電話するから  
達者でおるんやで。ほんだらな、拓馬、

休憩時間。拓馬の教室を訪ねている  
真宵。ドアの所で男子生徒1と会話  
中。  
真宵「C組の北友です。穂苺さん、呼んで  
もらえますか？」

男子生徒1「拓馬、休んでるよ」

会釈して、廊下を歩き出す真宵。ス  
マホのアドレス帳で、拓馬の電話番  
号を表示するが、どうしても押せな  
い。

真宵M「拓馬はその日から一週間連続で学  
校を休んだ。ジャクサとか国連とかを  
訪ねているのだろうか・あのサンマの

夜、どんな想いでいたんだろう。私は、拓馬に電話をかけて声を聴きたい衝動を、二千回以上我慢したが、ついに我慢しきれなくなり」

### ○北友家・真宵の部屋（昼）

スマホをプッシュしている真宵。呼び出し音。相手が通話に応じる音。

真宵「（安堵と緊張）もしもし・拓馬・うん？・うん。動画見た。あのさ、もしもよかったら（深呼吸）今からUSB、返しに行っても、いい？（唾を飲み）・うん、じゃあ持つていくね」

スマホを切ると、少し思案し部屋着を脱いで下着（ブラジャーとショーツ）になる真宵。下着姿で出掛ける

服を取っ替え引っ替え物色する。

真宵M「電話の声からは、拓馬の表情は読み取れなかった。拓馬は、離れないと見えなれないと言った。私は、離れてると見えない。だから逢いに行く」

真宵、引き出しから新品の下着（上下ともレースのブラジャーとショーツ）を出し、深呼吸して着替えはじめる。

真宵「・・・こんな時になに考えてんの？と笑うやつは笑ってくれ。私は真剣白羽だ」

### ○函館・川沿いの道（秋・夕方）

紅葉が微風に揺れ水面が光っている。おしゃれをした真宵、一人でぶつぶつ呟きながら歩いている。

真宵「よーい、スタートツ・拓馬、よかつ

たら私、今夜、泊まっていてもいい? :

ギャオースーち、直接的すぎる。だめ

っ! NG。テーク2。・よーい、スター

ツ。拓馬、よかつたら抱き合つて寝よう

か・えぐっ! もつと直接的じゃねえか

よー?! こんな全然正しくねえ・い

いや、待て待て真宵。正しいとかどうで

もしい。正義に身を寄せるな、痛み在身

を寄せろ。よし・テーク3」

真宵M「私は、心臓の位置にドキンドキン

と高鳴る爆弾を抱えながら、拓馬の家の

ピンポンを押した・それなのに・そ

れなのに・」

○穂苺家・玄関・外観(秋・夕方)

勢いよく開くドア、拓馬と康志だ。

拓馬「真宵ちゃん!」

康志「まいどお、いらっしやーい!」

真宵「うええ?! ・お、おと、おと・」

真宵、驚き過ぎて尻もちをつき、拓馬に抱き起こされる。

拓馬「あのね、真宵ちゃん、JAXAとN

ASAが民間に協力をあおいで父さんを」

康志「アメリカのロケットが迎えに来てく

れたんや。ごつつ大感謝や」

真宵「よか・よか、よかつたあ・」

拓馬「うん・」

真宵「なら、なら言つてよお! 私が、どん

な想いでいたか」

康志「俺はさっきの電話の時、真宵ちゃん、

おとん、今、帰ったでー” いうて叫ぼう、  
思ったんやけど、拓馬が俺の口をふさぎ  
よったんや」

真宵「ええっ?! 拓馬、なんでそんな」

拓馬「これ、お返し」

真宵「おかえし?」

拓馬「真宵ちゃんがついた、不治の病って  
嘘の」

真宵「なにー?! 拓馬、そのこと、ずつ  
と根に持ってたのお?」

拓馬「(にっこり) うん。根に持ってた」

真宵「ちっちええー! 穂苺拓馬めちやくち  
やちつちえー!」

拓馬「仕方ないよ。真宵ちゃんのこととは他  
のことは違うもん。根にぐらい持つよ」

真宵「だからって、だからって…」

康志「真宵ちゃん、ごめんやでー。けど堪  
忍したって。拓馬、あの日、うち帰って  
来てわんわん泣きよったんや。真宵ちゃ  
ん、病気じゃなかった” 言うて」

真宵「え・・」

#### ○四年前・穂苺家・拓馬の部屋

放り投げられたランドセル。拓馬  
(12)、康志(42)に抱きつき、嗚咽  
している。

拓馬「父さん、真宵ちゃん、病気じゃなか  
った。健康だった。よかったあー」

#### ○穂苺家・玄関・外観(秋・夕方)

微笑んでいる拓馬を見つめる真宵。

真宵「拓馬・・」

康志「ほんだら、ふたり、ぺこえもんやろ？」

おとんが炭火で、むっちやリブプライム  
な、アメリカンステーキ、炙っちゃうる」

拓馬「真宵ちゃん、上がって」

真宵「腰が抜けて、立てない。連れてって」

拓馬、真宵を軽々と抱き上げ、家へ。

※ここまで、2019年。

### ○北友家・真宵の部屋（春）

T・「2022年」

イーゼルに置いたキャンバスに油絵  
で拓馬の絵を描いている真宵（19）。  
髪が伸びて、大人っぽい雰囲気。

真宵M「時は巡り、今はコロナ。人類はま  
た未知の危機に遭遇している。逢いたい  
ひとに逢えない。逢わないことが逢いた

いひとを護る。そんな時代・拓馬は宇  
宙飛行士を目指すため、京都の立命館大  
学理工学部に進学した」

真宵のスマホが鳴る。相手は拓馬。

※以降、カットバックで進行。

### ○京都・拓馬の下宿（同刻）

ジャージ姿でマスクをあごにして通  
話中の拓馬（19）。少し精悍になった  
印象。

拓馬「聞いてよ、真宵ちゃんっ。大阪のや  
つは少しでもまじめな話をしようとする  
と、すぐに笑いに持っていこうとするん  
だよ」

真宵「さいでつか、難儀なこっちゃ（笑）」  
拓馬「うう、孤独だ」

真宵「うふふ。がんばって」

拓馬「もうがんばれない。逢いたい。逢いに来て」

真宵「そりゃ、私だって逢いたいけどさ」

拓馬「けど、なに？」

真宵「離れないと、見えない。でしょう？」

拓馬「真宵ちゃん、一本とらないでっ！今、

絶対、ドヤ顔してるでしょ？！」

真宵「今ね、拓馬の絵を描いてたんだよ。

服装はね、宇宙飛行士。背景はね。無限の宇宙」

完

本電子書籍は、2021年12月3日発行の『第27回函館港イルミネーション映画祭2021 第25回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第27回函館港イルミネーション映画祭2021

**第25回シナリオ大賞 函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品**

## 雲の切れ目から覗いた函館

作：塩田 泰造

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

---

2022年2月1日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>

---